

『天満千句』抄粗注

乾 裕 幸

「天満千句」は延宝四年（一六七六）十月に興行された宗因流俳

諧の代表的作品である。私はその第六「跳」百韻の初折と名残折の合計四十四句に注を施し、「連句への招待」（昭和五十五年刊、有斐閣新書。改訂版は昭和六十四年、和泉書院）に掲載した。そこで本誌の誌上を借りて、残りの二折・三折のつごう五十六句に略注を施そうと思う。「連句への招待」の四十四句と合わせて覽頂ければ幸いである。

数奇屋かゝりの窓の呉竹 宗恭

*
○一〇一。○雜。

○数奇屋がかり一茶室ふうに作り構えた建物。○窓の呉竹—「雪」と寄合。「吹きはらふ風はよわるしたをれに雪に声ある窓の呉竹。前大納言伊平」（玉葉集・冬）、「初雪の窓の呉竹ふしながらおもるうは葉の程ぞ聞ゆる 前中納言定家」（風雅集・冬）等。

○挨拶のかたひ一挨拶が堅苦しい。道学者めいて堅苦しいのを「孔子臭し」というから、前句「孔子」に付く。○雪消て一「窓の声」

のあしらい。類船集「鶯一雪消し庭」。

○一句は、堅苦しい挨拶を交すうちに雪が解けたという意。孔子時代の鶯が堅苦しい挨拶を交すわけである。つまりは、鶯の声がまだ打ちとけぬうちに雪が消えたという意になる。「氷だにとまらぬ春の谷風にまだ打ちとけぬ鶯の声 源順」（拾遺集・春）。

辺に植えられた吳竹に雪の消えるさまを付け寄せたのである。

女郎・局女郎)をいう。【色道大鏡】一「仮契」同、端女なり。端

居して仮の契りなるゆへにしかいふ」。

○一句は、端女郎を身のなりわいとする意にすぎない。付意は、匂に汲み込む谷の流れはいつも変わるが、同じ流れでも流れの女の境遇はいつまでも変わらぬ、というのである。

手水鉢匂の水ハかへれとも 素玄

○一オ三。○雜。

○手水鉢—茶室の内露地に置かれ、来客が手と口をすすぐで通る慣し。普通、自然石・鉄・銅等で作る。前句「数寄屋がゝり」に付く。
類船渠「手水—茶の湯」。○匂の水はかはれども—「吳竹のかけひ」の水は、あれども猶すみあかぬ宮のうちかな 平經正」(平家物語卷七)を踏んで「吳竹」に付く。

岩かねの五分三分うき思ひ 武仙

○一オ五。○恋(うき思ひ)。

○岩がね—大部分が大地に埋れた岩石。これを枕にして寝ることを岩が根枕という。「かね」に金を言い掛けた。「谷」に付く。類船渠「谷—岩根」。○五分三分—端女郎の揚代には、三匁・二匁・一匁五分と階級があり、五分、三分は最下級。おそらく懶嫁(よたか)などの類いであろう。

○「谷のながれ」に「岩がね」、「仮契り」に「五分三分」と接続して辻棲を合せ、岩が根枕を枕に、わずか五分、三分で身を売る流れの身はつらいものだというのである。

谷のながれをたつる—谷の流れを断つて匂に水を汲み込む。「ながれをたつる」は遊女で世を送る意。遊女を流れの女というによる。

松はひさしき茯苓人参

梅翁

○一オ四。○恋(仮契り)。

○谷のながれをたつる—谷の流れを断つて匂に水を汲み込む。「ながれをたつる」は遊女で世を送る意。遊女を流れの女というによる。謡曲「祇王」「祇王の御申しには、いづれも流れをたつるは同じ事にて候へば」。○仮契り一ヶチギリ。化契りとも。下級の遊女(端

しるしる よみ人しらず」（拾遺集・恋）を踏んで「岩がね」に接続。○茯苓一松の根に寄生する蘭系の塊。【倭名抄】卷二「松脂滴つて地に入ること千歳なるときは則ち茯苓となる」。薬効あり。

【和漢三才図会】に「其用有五、利小便也一、開腠理也二、生津液也三、除虚熱也四、止渴也五。但陰虛者可斟酌」（略）茯苓皮治水腎崩服、開水道、開腠理。○人参一薬効枚挙にいとまなし。

○わずかな利益を得るために、千歳の年経た松の、岩が根の如く大地にくいこんだ根方の下を掘り起こして茯苓を得る難儀をいったものであろう。なお「うき思ひ」に憔悴し、精気回復のために人参を服用するという心もある。

すでに廻向も急雨の跡 西鬼

○一〇八。○积教（廻向）。

○前句「紙袋あけ行」を仏事の供養の菓子袋を開けつつ帰るとみて「廻向の跡」と付け、「あけ行空」を雨が止んで晴れて行く空の意に取成し、「あけ行空の時鳥」に「急雨の跡」と続けた。一句はすでに回向も済んだということ。

○廻向一回向。供養のため仏事を営むこと。○急雨—ムラサメ。俄か雨。「時鳥」に付く。類船集「郭公一村雨」。

うにすぎず、「紙袋」は「あけ行」を導く序詞として、前句「茯苓人参」をあしらつたにすぎない。

西鬼

紙袋あけ行空の時鳥

西似

爰に来て逆縁ながら吊ハん 如見

○一〇七。○夏（時鳥）。

○紙袋一薬を入れる袋。「茯苓人参」に付く。類船集「袋一薬」「紙袋一木薬」。○あけ行空の時鳥—「短夜は思ひもあへずほとゝぎす明け行く空に初音なく也 入道二品親王性助」（新千載集・夏）。前句には「時鳥まつは久しき夏の夜をねぬに明けぬと誰かいひけむ按察使公通」（千載集・夏）によつて付く。

○付意は、久しく待っていた時鳥が短夜の明け行く空に鳴いたといさうするにて候」とある。

○一〇九。○釈教（吊はん）。

○爰に来て…吊はん—謡曲「朝長」「こゝにきて弔ふ我も朝長も」。○すでに回向も済んだ後だが、ここに来た上は逆縁ながら冥福を祈るうの意。謡曲「隅田川」の梅若丸の墓前に泣く狂女の佛か。同曲に「いかさま今日はこの所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申

お宿をかりて一會興行

西花

が付く。

○二一〇。○雜。

○お宿をかりて一謡曲「松風」「これは諸国一見の俗にて候。一夜の宿を御貸し候へ（略）逆縁ながら弔ひてこそ通り候ひつれ」等、謡曲常套の趣向による付合。○一會興行—連歌・俳諧などの会を一席催すこと。

○お宿を借りて、逆縁ながら追悼の一會を催すというのである。

途中より宗祇を同道申たり

梅翁

○二一〇一。○雜。

○宗祇—中世連歌の大成者。応永二十八年（一四二一）—文龜二年（一五〇一）、八十二歳。「一會興行」に付く。

○宗祇は各地を旅行し、数々の逸話を探している。正徳二年には『宗祇諸國物語』なる絵入仮名草子が刊行された程である。ここも旅中の宗祇を同道して一會興行に及んだという、いかにもありそうな話をでっちあげたのである。

裏判の威光を以て月の影

未学

○二一〇三。○秋（月の影、月の定座）。

○裏判—文書の文面を承認保証するために裏面に皆替花押。○月の影—「月ぞすむ誰かはここにきの國や吹上の千鳥独りなくなり 摂政太政大臣」（新古今集・冬）などによって前句「紀国」をあしらい、当句「威光」の光の字と縁語をなす。

○月影は裏判の威光を以て輝く。付意は紀州家の裏判の威光で、紀伊国ことは皆替があくというのである。当時紀州藩（五十五万五千石）は徳川家の支配するところ。八代将軍吉宗を出すなど將軍家とは密接な関係にあり、その威光のほどが偲ばれる。

七高祖をもかけて置露

○二一〇四。○秋（露）。

○七高祖—淨土教を相承した、慈樹・天親・雲鷲・道粹・普尊・源信・源空、以上七人の高僧。「威光」に付く。○かけて置く—「高砂

の尾上の鐘の音すなりあかつきかけて箱やおくらむ 前出納言臣房
〔千載集・冬〕。「かけて」は賭けて・掛けての掛詞。○置露—「月
の影」のあしらい。

○七高祖の名をかけてもと褒賞を捺し、その威光をもって文面を保
証するという意。

秋の雨自力の心ふり捨て

西鬼

○二一ウ一。○秋（秋の雨）。

○秋の雨…ふりー「ふり」は降りに振りを掛けた。「置露」のあし
らい。

○自力の心ふり捨て—七高祖は他力本願による往生を説いた
から、「七高祖」に付く。蓮如上人「御文章」の一節「雜行雜修ふ
り捨てて」による。謡曲「源氏供養」にこれを踏まえて「南無や西
方彌陀如来、狂言綺語を振り捨てて」とある。

○七高祖が連綿と他力本願の道を説き続けた、というのに、秋の雨
が降り去って露置くことを絡ませた句作。

奉加てならハ此破れ堂

直成

○二一ウ二。○雜。

○奉加—堂塔の建立、修理などのためになされる寄付、寄進。○破
れ堂—荒廃した堂。前句の「秋の雨」による荒廃という趣がある。

○自力で再建の志を捨て、奉加によってならこの破れ堂は再建する
心があると付けた。

彼帝おはしまさゝる其後ハ 西似

○二一ウ三。○雜。

○彼帝一カノミカド。聖武皇帝の佛。謡曲「安宅」「ここに中頃帝
おはします。御名をば聖武皇帝と名づけ奉り（略）應運那仏を建立
す。かほどの盡場の絶えなん事を悲しみて、俊乗坊重源諸國を勧進
す」。

○彼の帝が住まわれなくなつた後、堂は荒廃に帰した。よつて奉加
を求めて再建するというのである。

六十余年の国そさひしき 利方

○二一ウ四。○雜。

○六十余年—前田金五郎氏「西鶴譜纂新考」に江戸時代も「人生六
十年」であったと考證されている。六十余年に掛けた。○さびしき—
類船集「淋敷一亡跡」。

○善政をもつて敬慕されたかの帝が六十余年を以て崩御された。六
十余州の国民はさびしさを禁じ得ないでいる。

高野若衆思ひつゝけて独るの 西花

○二一ウ五。○恋（高野若衆）。

○高野若衆—高野山の寺僧の男色の相手。「醫驗尽」に「高野六十那智八十、紙一帖の数の事也。俗に若衆の年増の事とす」。高野六十は、俗に高野山では六十歳で男色の相手をつとめさせられる意とする。前句「六十余年」に付く。類船集「高野一六十の恋」。○独る—独身。「淋歎」に付く。類船集「淋歎—やもめ」。

○高野若衆を思ひつづけて、やもめぐらしのうちに六十余年となつた。さびしい限りである。この句「の」留り、談林において流行した。ここは「独るの六十余年」と前句にかかつてゆく。

留守に付さしきみやしつらん 武仙

○二一ウ六。○恋（付さし）。

○留守—「独る」に付く。類船集「留守—旅・独法師・蜜夫」。○付さし—自分の口をつけた盃を人に与え、情の深さを示すこと。○くみやしつらん—「忘れても汲みやしつらむ旅人の高野のおくの玉川の水 弘法大師」（風雅集・雜下）を踏んで「高野」に付く。

○前句の「独る」を一人旅とみて、その留守中、わが思いをかける若衆が他の者に心を移し、付さしなどを交しているのではないか、とおもいやつた次第。弘法大師の佛であろう。

此上ハ宮守のしるしであらためん 宗恭

○二一ウ七。○恋（宮守のしるし）。

○宮守のしるし—貞操のしるしに、雌雄一対のいもりの血を女の肌に塗つておくと、男に接すると消失するともいい、消そうとしても消えないともいう（諸説ある）。【増補はなひ草】恋の詞「いもりのしるし・付さしの盃」。

○留守中妻が浮気をしたかどうか、つけておいたいもりのしるしをあらためようというのである。

扱詞伏の壇にあかつて 如見

○二一ウ八。○釈教（調伏）。

○調伏—テウブクまたデウブク。怨敵・魔障を降伏するため、壇を設け護摩をたいて析る密教の修法。類船集に「宮守のしるし・消」とあり、ここは消そうとしても消えないもりのしるしを消すための調伏である。

○この上は、修法によって、消えないもりのしるしを消えるるしに改めんと、調伏の壇に上つた。

をし出す鷲多の海の舟や蘿 利方

○二一九。○雜。

焼酒の酔いに歌い騒ぐさまである。

○轉多の海 - 「轉多」は博多の誤。現在福岡市博多港。中世宋えた

三津の一。新羅（朝鮮半島）への航口をなす。「船出せし博多やいづら対島には知らぬ新羅の山ぞ見えける 津守国基」（夫木抄・雜五）。

○舟や歳一船櫻。船矢倉とも。軍船にも荷船にもある。

○新羅への船出にあたって、楼にしつらえた調伏の壇で、海の惡靈を調伏し、航路の安全を祈る修法を修する光景か。また、弘安四年（一二八二）六月博多の津へ元・高麗の兵船が米襲し、退散・降伏の法を修した史実がある。付合はこれによつたのかも知れない。

○前句を秋祭りのさまで取成し、押し出した船の櫓で音頭をとつて、

ねり酒一樽さゝんさの秋

梅翁

○二一十。○秋（秋）。

○ねり酒一清酒に鶏卵の蛋白を混ぜ、とろ火で煮た飲物。「和漢三才図会」に「練酒、筑前博多之練酒得」名、「似^フ白酒」而甚^{ハバ}粘其味甘、美也。「博多」に付く。類船渠「博多一煉酒」。○ざざんざーうたいさわぐさま。狂言小唄「ざざんざ節」の文句。狂言「すあふおとし」「首途を祝ふて遣ると有て大盃で三つ五つ、ほつてと酔ふた、ちと酔ふて参らう、ざざんざ、はま松のおとはざざんざ、ア、酔ふたさうな」。

庭訓の道行人にも馴る月 武仙

○二一一。○秋（月一句こぼす）。

○庭訓の道行人－和歌に多い「玉ほこの道行人」のもじり。庭訓は家庭の教訓。ここは「道行く」から「庭訓往来」の意を汲んで、初等教育に携る者、すなわち寺子屋の先生をいう。○馴る月－「いかならむ世にも忘れじ九重の秋の宮居になるる月かげ 為道朝臣」（新千載集・秋）。「秋」をあしらつた。

○子供は寺子屋の先生にもよく馴れてきたの意。前句「ねり酒一樽」は謝礼のつけ届け。

叡山のかたへ露のことつて 未学

○二一二。○秋（露）。

○叡山－比叡山。ここはその中腹にある天台宗總本山延暦寺をいう。○露－「月」のあしらい。「少し」の意がある。小粒銀の意もあるが、ここはそれではない。○ことづて－「恋死なばこひもしねとや王ほこの道行く人に言伝もなし 人麿」（拾遺集・恋）、「王ほこの道ゆく人の言伝も絶えて程ふるさみだれの空 藤原定家朝臣」（新古今集・夏）などから、「道行人」に付く。

○前句「道行人」を仏道を行く人、すなわち仏道修行者とみて「叙事山」を付け、叙事山にいる人のもとへ、道行く人に頼んでちょっとした言伝てをするというのである。

花に吹風も寒し布子着よ

素玄

○一ウ十三。○春（花、花の定座）。

○風も寒し——「波母山や小比叡の杉のみやまは風も寒しとふ人もなし」（風雅集・神祇）によつて「板山」を承ける。○布子—綿入の衣服。

○前句「ことづて」の内容を付け寄せた句。板山はなお花に吹く嵐も寒いことでしきう。綿入れを着て風邪など引かないようになさ

い。子を稚児にでも出した母親の、冴え返りを案する文である。

旅たつ空ハえ方也けり

利方

○三オ一。○春（え方）。

○旅たつ空—前句「よそにみて」が道行の常套語なので旅を連想。例えば謡曲「源氏供養」「花の都を立ち出でて、嵐につるる夕波の

白河表過ぎ行けば、音羽の滝をよそにみて」等。○え方—恵方。吉方・児方とも。その年の縁起のよい方向で、干支によつて歳徳神のいる方角に定める。正月元日に恵方に当る神社に参詣することから「一日の日」に付く。

○前句の「花に吹」ということばを生かして囀る鳥を出し、嵐の寒さを凌ぐために布子を着る理由として、その鳥が病氣あがりであるからと辯證を合わせた。

○一日の日一日の雑煮もよそにみて 梅翁

○三オ一。○春（一日の日・雑煮）。

○一日の日—ツイタチノヒ。正月一日。「鳥の囀り」に付く。「鳶の囀るけさの初音よりあらたまりける春ぞしらるる 後嵯峨院」（新拾遺集・春）等。○雑煮—元三に食する。「料理物語」に「雑煮は中味噌また清汁にても立つ。餅・豆腐・芋・大根・乾海鼠・串鮑・開鰐・莖立など入れてよし」。

○病みあがりの無氣力からか食発生のため、正月一日一日の雑煮にも手をつけないの意。

病あかり成鳥の囀り

西似

○二ウ十四。○春（鳥の囀り）。

○病あがり—病後まだ体力の回復しないこと。○鳥の囀り—「花」

に付く。

○前句の「花に吹」ということばを生かして囀る鳥を出し、嵐の寒

さを凌ぐために布子を着る理由として、その鳥が病氣あがりである

からと辯證を合わせた。

いうのである。

鼻もひぬ隣にむかひ大小便

未学

申せば、養ひ君の比叡山に兒にておはしますが、たゞ今もや鼻ひ給はんと思へば、かく申ぞかし」と答えた話が見える。これによつて「鼻もひぬ」に付く。○姥がふところー姥に抱かれる意であるが、

○三〇三。○雑。

○鼻もひぬーくさめもしない。「鼻をひる」(くさめをする)は兎事の起る前兆とされた。「出て行かむ人を留めむ由なきに隣のかたにはなんひぬ哉 読人しらず」(古今集・辭譜歌)から、出て行くのを止めもしれない意となる。

○一句の意は、くさめもしない、すなわち縁起がよくないからと書つて止めてくれない隣りの方へ向かつて大小便をしかけるというのであるが、とめもしないのは、旅立つ方向が縁起のよい恵方だからというのが前句の意。旅立ちに際して隣りの方へ大小便をしかけるというのは、諺に「糞をたれて逃げる」とあることく、隣り近所に不義理をしたまま逃げ出すという意をこめる。

朝夕に撫つさすつつ此茶入 西鬼

○三〇五。○雑。

○茶入—茶の湯道具の一。濃茶を入れる陶製の容器。

○前句「姥がふところ」を尾張國(愛知県)瀬戸地方の土で作った茶入「祖母懐」(俚言集覽)に取成し、乳母が養い君を可愛がるよに、朝夕大切に茶入の名器を撫でさするといったのである。

夜市はしまるすみよしの里 武仙

○三〇六。○秋(住吉の市)。

○夜市一夜たつ市。茶入はその商品。○すみよしの里—現在の大坂市住吉区から堺市北部に及ぶ地名。「朝夕に見ればこそあれ住吉の浦よりをちの淡路しまやま 津守国冬」(新後拾遺集・雑)によつて「朝夕に」を承ける。

やしなひ君や姥かふところ 宗恭

○三〇四。○雑。

○やしなひ君ー乳母が自分の養育した子をいう呼び名。徒然草四七段に、清水寺参詣の道中「くさめくさめ」と言ひ続ける老尼にそのわけを聞くと、「や、鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと

安全な場所の意もある。

○養ひ君が乳母に抱かれて大小便をする意に、乳母のふところで大切に養育され、風邪一つひかぬという意を絡ませた付合。

○一句は住吉の里に夜市がたつたというにすぎない。住吉の市は、陰曆九月十三日住吉神社の神前に新米を供える祭儀。境内で米をはかる升、銀を入れる取鉢を充つた。これを通常の夜市に転じ、茶入なども充るとみた付合である。

松かさのかづきもの成露しぐれ 直成

○三オ七。○秋（露しぐれ）。

○松かさ「すみよし」に付く。住吉の松は歌枕。○かづきもの一頭にかぶるもの。前句「夜市」に市女がかぶる笠。厄介ものの意もある。○露しぐれ一時雨の」とく降る露。

○一句单独では、松笠の笠の上に露時雨が降るというだけの意。前句に付くと、「松かさの」は「かづきもの」を導く序調にすぎず、夜市でかぶりもののに露時雨の降るのは厄介でいやなものだという意になる。

野の宮も不案内なる暮の月 素玄

○三オ九。○秋（月、月一句引上げ）。

○野の宮一齋宮に立つ内親王・女王が潔齋のためにこもる仮の宮。現在の京都市右京区嵯峨野にあつた。源氏物語「賢木」に野宮のことを叙して「ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなめり。くろ木のとりるどもさすがに神々しう見わたされて、わづらはしきけしきなる」とあり、これによつて類船集に「野宮一黒木鳥井」「黒木一野々宮の鳥居」の付合を挙げる。前句「くろ木」を、皮のついたままの丸木で作った鳥居とつて付けた。「毛吹草」諸国名産にも「大原一杉丸太」と見える。○不案内一様子、勝手のわからぬこと。○暮の月一謡曲「野宮」「夕暮

／＼黒木壳りの呼び声。黒木は八瀬大原の里から壳り出す舊蒸した薪の木。『羅州府志』に「村婦頭上ニ戴キ、村夫肩ニ負ヒ、又牛馬ニ之ヲ載セ来リ、京師ニ壳ル」。「かづきもの」に付く。

○一句は、黒木壳りの黒木には紅葉の木も混っているというので、紅葉と黒木の取合せである。大原女が頭にかづいて呼び壳りする黒木には、松の黒木、紅葉のくろ木も混っている。かづきものに露時雨の置く道理。

紅葉こきまぜくろ木ハ／＼ 梅翁

○紅葉こきまぜー「網代木に紅葉こきまぜよるひをは錦を洗ふ心地こそそれ 橋義通朝臣」（後拾遺集・冬）。「露時雨もる山かけの下紅葉ぬるともをらん秋のかたみに 藤原家隆朝臣」（新古今集・秋）によつて「露時雨」に付く。また類船集「紅葉一松」。○黒木は

の二柱に立ち隠れて」。「紅葉」のあしらい。

○「前句を、紅葉の木の間に黒木鳥居を尋ね歩くまとみて、野の宮も不案内だと付けたのであり、光源氏の野宮詠を佛としている。

謡曲「野宮」「これなる森を人に尋ねて候へば、野の宮の旧跡とかや申し候程に（略）この森に来てみれば、黒木の鳥居小柴垣、昔に変らぬ有様なり」。

わすれはあて、蓼酢する也 西似

○三オ十二。○夏（蓼）。

○わすれはあて、一忘れ果てて。前句に引いた謡曲「鶴銅」の文句取り。「わすれはあて、」としたのは、謡の謡い口をそのままつたのである。○蓼酢—蓼の葉をすつて混ぜた酢。「和漢三才図会」「食ア魚脂ア用ア蓼酢ア」「鮎」に付く。

○殺生禁断の場所で鮎を釣った。罪業も報いも後世のことも忘れ果て、ひたすら鮎を食うための蓼酢を、蓼をすつて作るというのである。

深ひか浅ひか此有栖川 未学

○三オ十。○雜。

○有栖川—野宮の東を流れて桂川に注ぐ小川。「野の宮」に付く。

類船集「野宮—有栖川」。

○この有栖川が深いか浅いかは、野々宮人も不案内でよくわからぬい。遺句めいた句。

けに真練木ハ下女にもんまる、梅翁
○三オ十三。○雜。

○練木—レンギ。すりこぎ。

○すりこ木はいつも下女にもまれ、今現に蓼酢をすつてているという意。「閑吟集」の「げにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下にもまる」とよって一句を仕立て、前句「わすれはあて、」をあしらつた。「もんまる、」も「わすれはあて、」同様、歌謡の歌い口による。

鮎釣つた罪も報も後の世も 如見

○三オ十一。○夏（鮎）。

○鮎—嵯峨・桂川の鮎は有名。「有栖川」に付く。

○有栖川で鮎を釣つたが、その罪は深いか浅いか。謡曲「鶴銅」「かづき上げすくひ上げ隙なく魚を食ふ時は、罪も報いも後の世も、忘れ果てて面白や」を踏む。

格氣の後ハ投足をして

西鬼

やすと続けた。

○三〇十四。○恋（格氣）。

○格氣一情事に觸する嫉妬。「練木」に付く。類船渠「格氣一摺粉木」。○投足一足を投げ出して坐る」と。

○格氣いさかいしたあとは、足を投げ出して、すりこ木のように硬直した足を下女に揉ませるというのである。「練木」に淫靡の意があろう。

恋風や揚屋か軒に通ふらん

利方

おろそとハコハ情なき仰にて 宗恭

○三二二三。○恋（おろす）。

○おろそーおろそう。おろすとは堕胎する意。類船渠「おろすーはらみ女」。前句の「ひやしのもの」を魚肉料理とみて、「三枚におろす」などの縁で出したと思われる。類船渠「おろすー胎・魚」。

○おなかの赤ちゃんをおろすなんて、そんな薄情な仰せなら、二人の中ももうこれつきりね。

○恋風一切なる恋心を身にしむ風に譬えていう。○揚屋一遊廓で置屋（遊女屋）から遊女を呼んで遊ぶ家。

○一句、「風が軒に通ふらん」と筋道を立て、それに前句「格氣」

の縁で恋・揚屋を絡ませ、「揚屋に通ふらん」と仕立てた。格氣い

さかいに疲れた身は足を投げ出してここにあり、心は揚屋の軒に通い、遊女のもとへ行ってしまっているというのである。

たより諸の跡の遠平

梅翁

○三二四。○雜。

○たより渚一たよりなきに渚を掛けた。○遠平一源頼朝の家臣土肥次郎実平の男。

○謡曲「七騎落」による趣向。石橋山の合戦に敗れた頼朝主従八騎

船に乗って落ちる際、八騎落の不吉な先例を忌んで、一人すなわち遠平を選んで船から下ろし渚にとどめる。前句は下船を命じられた

ときの遠平のことば「遠平幼く候とも君の御大事に立たん事、誰に

二人の中をひやしもの也

直成

か劣り候べき、御船よりは下りまじく候」により、付句は「諸にひれ伏し」た遠平の頼りなげな様子を作る。

飛かねたる千鳥一疋波に有 西花

○三ウ五。○冬（千鳥）。

○渚一「千鳥」に付く。類船集「渚一千鳥」。
○友千鳥が皆群立つたのに、ただ一羽飛び立つことの出来なかつた千鳥が、遠く、頼りなく波に漂つている。

古風な句作り寒き川風

○三ウ六。○冬（寒き）。

○古風な句作り「飛かねたる」に付く。談林新風において、飛躍的に句境を転じる奇矯異体の付合を「飛ぶ」風といい、貞門古風から「飛跡」と非難された。逆に談林から貞門をみると「飛かねたる古風な句作り」ということになる。○寒き川風「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒みちどり鳴くなり貰之」（拾遺集・冬）。前句「飛かね」を「思ひかね」に転じ、この歌を踏まえて付ける。

○語注に記したことばの応接が主。飛びかねた千鳥ゆえ、句は古風であるという論理。千鳥自身の句作り（類船集「文字一千鳥」）とも、千鳥を見ての句作りとも解せる。

都出て立圃と申者なるか 西似

○三ウ七。○雜。

○都出て一「都いでて今日みかのはら泉がは川風さむし衣かせやま読人しらず」（古今集・鶴旅）によって「寒き川風」に付く。○立圃一野々口庄右衛門親重。貞門俳人。京の人。寛文九年没、七十五歳。家業に雑人形を営んだので雑屋、また紅粉染に巧みだったで紅屋とも称した。俳諧は連歌風の正風体を重んじ、立圃流と呼ばれる。前句「古風な句作り」に付く。

○一句旅名乗りの体。諸国吟行に出た立圃が古風な句作りを披露するという意。

伏見にかかる銀の口あひ 素玄

○三ウ八。○雜。

○伏見一現在京都市伏見区。西国下りの経路。「都出て伏見にかかる」と続く。○銀の口あひ一銀（カネ）の貸借に関するとりもちら保証。家康が伏見に銀座を置いたのは慶長六年五月で時代が近い。

「口あひ」は間に立つて口を聞き保証すること、またその人。他に地口・洒落の意もあり、これは俳諧師立圃へのあしらいと思われる。○前句の旅を雑商人立圃の商用の旅とみ、伏見において銀の貸借に

立ち合つたさまを付け寄せた。もちろん狂言。

お城山当月切に貰よせて 西鬼

○三十九。○雑。

○お城山—お城のある山。ここは桃山の伏見城。○当月切—今月限り。今月中に債務を弁済すべき契約。

○前句「かゝる」を入賃の意に取成し、伏見桃山城築城にかかる費用を工面したが、弁済の期限は今月中とて、債権者から貰めたてられるというのである。一句はこれに城攻めを絡ませた趣向。

七日くづれの跡の秋風 武仙

○三十九。○秋（秋風）。
ただし、前句に付くとお城が七日に落城する意となる。「くづれ」は陣立てが崩れ敗走すること。

○大阪城は元和元年四月二十九日当月切りにとばかり攻め立てられ、五月七日落城した。付合はこれに基づくのであろう。落城後、城跡の山にさびしい秋風が吹く。

とやへへと法事過れハ散霧に 如見

○三十九。○秋（霧）・祝教（法事）。

○法事—初七日の法事。「七日」に付く。類船集「七日—無跡を弔ふ」。○散霧—「秋風」をあしらつた。

○前句「くづれ」を集まつて人の散る意に取成し、初七日の法事がすんで、どやどやと参会人が帰るさまを付けた。

見よ幽盤の影の農明

宗恭

○三十九。○秋（農明、月一旬こぼす）。

○農明—農明（アリアケ）の誤。夜明けまで残る月。影の在りに苗い掛ける。「散露」のあしらい。

○夜を徹した法事も終わり、人々が散つて行つたあと、見よ有明の月影に、回向に感じて幽盤が姿を現わしたではないか。

待うたひ花に声する斗也

直成

○三十九。○春（花、花の定座）。

○待うたひ—待ち謡。夢幻能において、後ジテの登場を待つ間に、前ジテ中入後、ワキの謡う上歌をいう。例えは「八島」では「声も更け行く浦風の松が根枕聲てて、思ひをのぶる苔庭、重ねて夢を待ちゐたり」の待謡が終わると、源義経の幽盤が登場する。○花に声する—落花の形容。謡曲「東屋居士」「花に声ある嵐かな」。「いま

はとて月も名残やをしむらむ花散る山の有明の空 内大臣」（続古今集・春）によつて「辰明」をあしらつた。

○前句の幽靈を能舞台で後ジテの扮するそれとみ、いまやワキは待謡の上歌をうたうばかりであるといふのである。

うけ持て居る霞をてうと

未学

○三ウ十四。○春（霞）。

○うけ持て居るーある役目を分担しているといふ意で「待うたひ」を承け、酒盃を引き受けける意で下に続く。○霞—酒をいう。「花」に付く。○てうどーたつぶり、なみなみと。酒をのむ時などにいう。

○前句を花見の宴席で謡をうたうとみ、なみなみと酒盃をさし受けのむと付けた。